

福沢諭吉著「学問のすすめ」岩波書店を読む

学問のすすめ

- 1 . (1) 天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと伝へり。されば天より人を生ずるには、萬人は萬人皆同じ位にして、生まれながら貴賤上下の差別なく、萬物の靈たる身と心との働を以て天地の間にあるよろづの物を^と資り、以て衣食住の用を達しし、自由自在、互に人の妨をなさずして各安樂に此世を渡らしめ給ふの趣意なり。

(2) されども今廣く此人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、其有様雲と^{どろ}坭との相違あるに似たるは何ぞや。其次第甚だ明なり。實語教に、人學ばざれば智なし、智なき者は愚人なりとあり。されば賢人と愚人との別は學ぶと學ばざるとに由て出来るものなり。

(3) 又世の中にむづかしき仕事もあり、やすき仕事もあり。
其むづかしき仕事をする者を身分重き人と名づけ、やすき仕事をする者を身分輕き人と云ふ。
^{すべ}都て心を用ひ心配する仕事はむづかしくして、手足を用る力役はやすし。
故に醫者、學者、政府の役人、又は大なる商賣をする町人、^{あまた}夥多の奉公人を召使ふ大百姓などは、身分重くして貴き者と云ふべし。

(4) 身分重くして貴ければ自から其家も富で、下々の者より見れば及ぶべからざるやうなれども、基本を尋れば唯其人に學問の力あるとなきとに由て其相違も出来たるのみにて、天より定たる約束にあらず。
諺に云く、天は富貴を人に與へずしてこれを其人の働に與るものなりと。
されば前にも云へる通り、人は生れながらにして貴賤貧富の別なし。
唯學問を勤て物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無學なる者は貧人となり下人となるなり。
- 2 . (1) 學問とは、唯むづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を樂み、詩を作るなど、世上に實のなき文學を云ふにあらず。
これ等の文學も自から人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども、古來世間の儒者和學者などの申すやうさまであがめ貴むべきものにあらず。
古來漢學者に世蔕持の上手なる者も少く、和歌をよくして商賣に巧者なる町人も稀なり。

これがため心ある町人百姓は、其子の學問に出精するを見て、やがて身代を持崩すならんとて親心に心配する者あり。

無理ならぬことなり。畢竟其學問の實に遠くして日用の間に合はぬ證據なり。

(2) されば今斯る實なき學問は先づ次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き實學なり。

譬へば...

(ア) いろは 47 文字を習ひ、

(イ) 手紙の文言、

(ウ) 帳合の仕方、

(エ) 算盤の稽古

(オ) 天秤の取扱

等を心得、尚又進で學ぶべき箇條は甚多し。

地理學とは日本國中は勿論世界萬國の風土道案内なり。

究理學とは天地萬物の性質を見て其働を知る學問なり。

歴史とは年代記のくはしき者にて萬國古今の有様を詮索する書物なり。

經濟學とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり。

脩身學とは身の行を脩め人に交り此世を渡るべき天然の道理を述たるものなり。

(3) 是等の學問をするに...

何れも西洋の翻譯書を取調べ、

大抵の事は日本の假名にて用を便じ、

或は年少にして文才ある者へは横文字を讀ませ、

一科一學も實事を押へ、

其事に就き其物に従ひ、

近く物事の道理を求て今日の用を達すべきなり。

(4) 右は人間普通の實學にて...

人たる者は貴賤上下の區別なく皆悉くたしなむべき心得なれば、

此心得ありて後に土農工商各其分を盡し銘々の家業を營み、

身も獨立し家も獨立し天下國家も獨立すべきなり。

[コメント]

大不況の今だからこそ、「身の獨立」「天下國家の獨立」そして「獨立自尊」とは何かを「學問のすすめ」を通して、福沢先生を通して深く考えることが大切と思う。

- 2009 年 3 月 28 日林明夫記 -